

受験番号		氏 名		クラス		出席番号	
------	--	-----	--	-----	--	------	--

試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

2014年度 全統マーク高2模試問題

国 語 (200点 80分)

2015年2月実施

注 意 事 項

- 1 解答用紙に、正しく記入・マークされていない場合は、採点できないことがあります。
- 2 この問題冊子は、46ページあります。問題は4問あり、第1問、第2問は「近代以降の文章」、第3問は「古文」、第4問は「漢文」の問題です。
 なお、大学が指定する特定分野のみを解答する場合でも、試験時間は80分です。
- 3 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば、

10

 と表示のある問いに対して③と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄の③にマークしなさい。

(例)

解答番号	解 答 欄
10	① ② ● ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨

- 5 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけません。

問題を解く際には、「問題」冊子にも必ず自分の解答を記録し、試験終了後に配付される「学習の手引き」にそって自己採点し、再確認しなさい。

河合塾



国

語

(
解答
番号

1

、

36

第1問 次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。（配点 50）

日本で自然についての議論がはじまるのは、一九七〇年代に入った頃からではないかと思う。もちろん環境問題としては一九五〇年代後半から熊本県のチッソ水俣問題が議論されていたし、それよりはるか以前に足尾鉍毒事件も起こっている。しかし一九六〇年代までの環境問題は、「自然」の問題として議論されていたわけではなかった。それらは鉍毒事件であり、公害問題だった。六〇年代には都市の環境が都市公害として問題になったが、「自然」が問われるようになるのは、七〇年代に入って「開発か自然保護か」が課題になりはじめてからである。

こうして日本でも自然についての議論が開始されるが、Aそれはきわめて不十分なレベルにとどまっていた。開発を推進しようとする人々にとっては、自然は経済発展のための改造すべき対象にすぎなかったし、自然保護をアトナえる人たちも「貴重な自然」を守ろうと訴えるだけで終わっていた。もちろん「貴重な自然」は存在する。Xだがそう主張するだけで十分なのだろうか。

自然を人間の外にある客観的な対象としてとらえるのは、欧米的な発想にすぎない。ここから生まれてくるのは客観的な自然をいかに管理すべきか、という発想であり、「開発」も「保護」もこの発想から生まれてくる。結論は正反対になっても、自然を客観的な対象としてとらえる点では、両者に相違はない。

自然にはさまざまなとらえ方がありうる。経済的資源として自然を認識するのもそのひとつだ。あるいは生態系の世界として認識するのも、そのひとつである。認識の方法はひとつではない。なぜなら認識の方法には価値判断が、意識的であれ無意識的であれともなうものであり、価値判断はひとつではないからである。自然を人間によって克服されるべき対象としてとらえるのも、ひとつの価値判断である。逆にB自然をひとつの生態系としてとらえるのも、それを妥当なものと考えer価値判断と一セツトになっている。生態学的にとらえられた自然が客観的真理を表現しているようにみえるのは、科学によってみいだされたもの

が真理であるという近代のイデオロギーに、私たちの時代が支配されているからにすぎない。

とともに価値判断とは、関係のとり方によって決定される。自然を克服対象とする価値判断は、自然とのあいだにそのような関係をとることによって成立するし、自然を生態系としてとらえる価値判断も、自然とそのような関係をとることで形成されるものである。自然をどのようなものとしてとらえるかは関係のとり方であり、だからこそ農民には農民の視点からみた自然がみえているし、都市の人々には都市の人々からみた自然がみえているのである。哲学がとらえようとする自然は客観的な存在ではない。

私は自然を交通概念をとおしてとらえようとしている。私たちが生きる世界には、自然と自然の交通、自然と人間の交通、人間と人間の交通という三つの交通が成立している。人間と人間の交通はときに経済的関係や社会的関係をつくりだしたりもするけれど、この三つの交通はそれぞれが単独で成立しているわけではなく、相互的に干渉し合っている。人間と人間の交通によってつくられたシステムが自然と人間の交通を変え、それによって自然と自然の交通も変わっていくように、である。とすると、この三つの交通がどのように変化しながら、現在の自然と人間は存在するようになったのか。

もちろんこのような視点もまた私の価値判断と無関係ではない。私は社会を交通という視点からとらえている。「交通」という概念は「交流」、「関係」と表現しても構わない。なぜなら「関係」は「交流」のなかに成立するし、それは「交通し合う関係」でもあるからである。そしてこのようにとらえること自体が、私の社会認識における価値判断のシヨ^(イ)サンでもある。私は交通Ⅱ交流Ⅱ関係がこの世界をつくりだしているのとらえる。

Yなぜ社会システムや経済システムではなく「関係」なのか。

そのひとつの理由は私が群馬県の山村、上野村に長期滞在するようになったことにあった。私がみた上野村、それは自然と人間が交通し、人間と人間が交通し合うなかに、村というひとつの共同体を形成している、そんな社会であった。とともにもうひとつの理由は、この村での滞在と、かつて読んだ初期マルクスの文献が共鳴するようになったことにもあった。それは次のよう^(注1)

なことである。

初期マルクスの代表的な文献に『経済学・哲学草稿』がある。この本のなかに「人間は類的存在である」というような言葉がでてくる。「人間は本来は類的存在である。しかし資本主義という疎外された社会においては、個と類の関係が疎外された関係になる」というような文脈でこの言葉はでてくる。

C

ここで書かれている「類」とはどのような概念なのか。マルクスの本を読むようになってしばらくのあいだは、私はフョイエルバッハの類概念を念頭においていた。マルクスが『経済学・哲学草稿』にチャク^(ウ)シュ^(ウ)したのは一八四三年の終わり頃であり、フョイエルバッハの代表作のひとつである『キリスト教の本質』が発表されたのは一八四一年だった。もっともマルクスはただちにそれを読んだわけではなく、一八四三年の春に別の文献を読んだらしい。

フョイエルバッハは人間の愛という本質が神となって外化し、人間を支配するようになる疎外の構造、あるいは自己疎外の構造を論述した哲学者でもあった。彼にとっては「理性と愛と意思の力」は人間の本質であり、この本質が人間の類としての存在を成立せしめるものであった。

このような類のとらえ方が、「理性と愛と意思」ではないにせよ、マルクスにも受け継がれていたのだろうと私は考えていたのである。人間は本来類的な存在だということかたちで。ところが後に、マルクスの類のとらえ方はもっと複雑であると気づかされることになった。

マルクスが書いたノートとして刊行されている文献のひとつに『マルクス経済学ノート』がある。少なくともその大半は『経済学・哲学草稿』を書く直前にはつくり上げられていたと考えられる研究ノートである。そのなかに、ジエームズ・ミル^(注3)について書かれた次のような記述がある。

「生産そのものの内部での人間の活動の生産物のおたがいの間での交換も、ひとしく類的活動であり、類的精神である。そしてその現実の、意識的な真の定在は社会的活動であり、社会的享受である。人間は真に共同体的な存在である、というのが人間の本质であるのだから、人間はその本質を発揮することによって人間的な共同体を……創造し、うみだすのである」

人間は社会的な動物であり、さまざまな活動や交換などをして共同体的な存在として自己をつくりだす。人間は社会的な結び合いのなかに存在する類的、共同体的存在である。この文脈に従うなら、人間はさまざまな関係によって自己を存在させる、その意味で類的、共同体的な存在だということになる。つまり関係、交通という^(エ)エイイが人間を類的存在にするのであって、「理性と愛と意思」という人間の本性が類的存在としての人間をつくるというフォイエルバッハの論述とは違う類概念がここでは用いられていることになる。

私とマルクスの関係は複雑である。一面では私はマルクスに対して批判的な態度をとってきた。しかしにもかかわらず私はマルクスからいろいろなことを学んでいる。さまざまな関係を交通としてとらえていく方法は、この『経済学ノート』のミルに関する記述からえている。とともに交通の変容が自然と人間の双方を変化させていくという考察も、ここからヒントをもらっている。

しかし他方で私は、マルクスのように資本主義的な交通の変容を説明するために、人間の本質としての純粋な「類的存在」を設定してはいない。自然も人間もすべては変容とともにあるというのが、私の発想である。ただし近代以降の自然と人間の世界をとらえるためには、近・現代がもたらした労働や経済、社会、価値意識や精神の変化が人間と人間の交通、自然と人間の交通をいかに変え、自然と自然の交通までも変えていったのかを考察する必要があると考えていた。

私にとって自然哲学は、自然の考察という狭い枠に収まるものではない。関係Ⅱ交通をとおして自然と人間の双方を^(オ)ケントウする分野であり、交通の変容をみることによって現代世界の構造を自然哲学の視点からとらえようとするものである。それは人間学でもあり、ひとつの社会思想でもある。そうなる理由は、はじめに述べたように、私が自然を人間の外にある客観的なものとして位置づけていないところにある。^D自然は交通とともに存在し、交通の変化によって変容していく存在である。とすればこの交通の変容のなかに、人間も、私たちの社会もまた存在している。この視点は、今日においても変わることはない。

^{うちやまたかし}
(内山節『自然と人間の哲学』による)

(注)

- 1 マルクス——ドイツの経済学者・哲学者（一八一八～一八八三）。
- 2 フォイエルバッハ——ドイツの哲学者（一八〇四～一八七二）。
- 3 ジェームズ・ミル——イギリスの歴史家・哲学者（一七七三～一八三六）。

問1 傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1

5

(ア)

トナえる

1

- ⑤ 時代コウシヨウをする
- ④ 優勝のシヨウキンを与える
- ③ 校歌をセイシヨウする
- ② 犯罪のオンシヨウとなる
- ① 友人をシヨウタイする

(イ)

シヨサン

2

- ⑤ 物見ユサンに行く
- ④ サンコの礼をもって迎える
- ③ スイサン業に就く
- ② 展覧会にキヨウサンする
- ① 公園をサンサクする

(ウ)

チャクシユ

3

- ⑤ シュクン賞を受ける
- ④ 植物のシユシを観察する
- ③ 事情チヨウシユを受ける
- ② シュワンを発揮する
- ① シュビ一貫した態度をとる

(エ)

エイイ

4

- ⑤ エイジュウ権を得る
- ④ 祖国のエイユウになる
- ③ エイセイ管理をする
- ② 基地をセツエイする
- ① エイビンの精神をもつ

(オ)

ケントウ

5

- ⑤ ケンビキョウで見る
- ④ 会社をサイケンする
- ③ 役職をケンニンする
- ② 勝利にコウケンする
- ① 著書にケンインする

問2

傍線部A「それはきわめて不十分なレベルにとどまっていた」とあるが、筆者がそのように言うのはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

6。

- ① 自然についての議論が開始されたのは公害問題を解決するためであったのに、開発か保護かという二者択一的な議論に終始することで、公害や環境の問題がないがしろにされてしまったから。
- ② 自然を開発するか保護するかという議論は、自然を客観的な対象としてとらえる欧米的な発想に基づいており、そうした発想は欧米では通用しても日本では受け入れがたいものだったから。
- ③ 自然を経済的資源としてとらえて改造しようという主張も、理想的な自然を想定して保護しようという主張も、ともに人間は自然を管理できるという欧米の傲慢な考え方に基づいているから。
- ④ 自然を人間の外部にある対象として位置づけ、そうした自然を開発すべきか保護すべきか議論するというあり方には、人間と自然との相互的な関わりを考察するという観点が抜け落ちているから。
- ⑤ 自然を客観的な対象としてとらえているという点では同じなのに、経済を優先して開発を推進する立場と環境を優先してそれを保護しようとする立場とで争いあうのは不毛なことだから。

問3 傍線部B「自然をひとつの生態系としてとらえる」とあるが、それについて筆者はどのように考えているか。その説明と

して最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

- ① 科学的な視点から自然を見ることに価値を置く概念に基づいており、多様な自然認識のうちの一つであって必ずしも普遍性はないが、現代においては人々に正しいあり方として受け取られやすいと考えている。
- ② 自然を経済的資源として認識するあり方と同じく、近代的な自然観のもとに形成されたものであるが、特定の価値判断に立脚しているにもかかわらず科学を装っているところに欺瞞ぎまんがあると考えている。
- ③ 科学的真理に基づいているという点では妥当性があり評価できるが、近代的なイデオロギーに支配された考え方という点では限界があり、自然についての一面的な理解にすぎないものだと考えている。
- ④ 自然を経済発展の資源として認識するあり方から脱却しようとしているものの、近代科学のイデオロギーに支配されているという点では、自然を人間が克服すべき対象とする考え方と通じていると考えている。
- ⑤ 自然を客観的な対象としてとらえるという欧米的な発想の枠組みを出ないものであり、自然をさまざまな価値基準からとらえるようになった現代では、もはや有効性をもちえないものだと考えている。

問4

傍線部C「マルクスの本を読むようになってしばらくのあいだは、私はフォイエルバッハの類概念を念頭においていた。」とあるが、筆者はその後、「マルクス」と「フォイエルバッハ」の関係をどのようにとらえるようになったのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

- ① マルクスは、理性と愛と意思が神によってもたらされたおかげで人間は類的存在になったというフォイエルバッハの類概念に影響を受けつつも、社会のなかで自己を形成するという人間の努力の重要性を認識している。
- ② マルクスは、人間は生まれつき備わった性質によって類として存在しているというフォイエルバッハの類概念とは異なり、社会的な動物としての人間がさまざまな関係によって自己を形成することで類的存在になると考えている。
- ③ マルクスは、人間に先験的に備わった性質が人間を類として存在させるというフォイエルバッハの類概念を継承しながら、類的存在としての人間には理性や愛ばかりでなく社会のなかでの他者との結び合いも必要だと考えている。
- ④ マルクスは、人間は本来的に類的な存在であるというフォイエルバッハの類概念の観念性を否定し、そのような誤った認識が資本主義的な経済社会におけるさまざまな問題を引き起こした要因であると鋭く批判している。
- ⑤ マルクスは、理性と愛と意思は類的存在としての人間の本性であるというフォイエルバッハの類概念に疑問を呈し、人間の本性は自らが生まれながらにして社会的な動物であることを自覚するところにこそあると説いている。

問5

傍線部D「自然は交通とともに存在し、交通の変化によって変容していく存在である。」とあるが、それはどういうことか。本文全体の内容に照らして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9。

① 従来の自然哲学は自然を外的に考察することに終始していたが、自然と人間は互いに関係しあうことで成り立っているという事実に立脚し、自然と人間双方を視野に入れることで現代世界全体の構造をとらえるものへと哲学を変容し発展させていかなければならないということ。

② 自然は人間の外にある客観的な存在ではなく、公害問題をはじめさまざまなかたちで人間社会に干渉してくるが、人間がそうした自然を克服しつつも人間や人間社会の本質を見つめなおすことによって、自然と人間とが豊かに関係する本来的なあり方へと変貌していくということ。

③ 自然の世界はそれ自体単独で存在しているのではなく、つねに人間社会の影響を受けて成立しているものであり、人間が自身をどのような存在としてとらえ、どのような思想や価値意識に基づいて社会を形成しているかによって、自然に対する認識の仕方も変化すること。

④ かつて自然は人間とさまざまに交流しあいながらそれ自体豊かな世界を形成していたが、近代になり資本主義社会の成立によって経済発展が優先されるようになると、人間と自然との関係は、人間が自然を支配し自然が人間を疎外するというあり方へと転化していったということ。

⑤ 自然と人間との関係は、人間同士の交流がつくりあげる社会の仕組みや自然世界内部の関係性から自立して存在するものではなく、それらは相互に密接に影響しあっており、自然と人間が複雑に結び合うそうした諸関係の移り変わりが自然のあり方を変えていくということ。

問6 この文章の表現と構成について、次の(i)・(ii)の問いに答えよ。

- (i) 波線部 **X** 「だがそう主張するだけで十分なのだろうか。」と、波線部 **Y** 「なぜ社会システムや経済システムではなく『関係』なのか。」の表現上の特徴について説明したものとして最も適当なものを、次の ① ～ ④ のうちから一つ選べ。

解答番号は 10。

- ① **X**は筆者自身も明確な結論が出せていない問題について読者に問いかけているが、**Y**は筆者が確信を持って考えを述べるにあたって問題点を明確にしている。
- ② **X**はここでの「主張」を補強する論を述べるための契機となっているが、**Y**は読者にとともに考えてもらうために疑問点を示している。
- ③ 両者とも疑問文の形をとっているが、**X**は反語になっているのに対して、**Y**は本文の主題に関わる内容について問題を提起している。
- ④ 両者ともに疑問点を提示しているが、**X**は「だが」という逆接の接続語を用いることで、**Y**よりも読者の注目を集める工夫が施されている。

(ii) この文章は、空白行によって四つの部分に分けられているが、その全体の構成を説明したものとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 11。

- ① この文章は、最初の部分で問題点を示し、第二の部分でそれに関わる筆者の考えを述べ、第三の部分で論を深め、最後の部分で結論を述べるという構成になっている。
- ② この文章は、最初の部分で一般論を述べ、第二の部分と第三の部分でそれについての具体的な話題を提示し、最後の部分で一般論に戻るという構成になっている。
- ③ この文章は、最初の部分が全体の主旨を表し、第二の部分でそれに関わる説明を加え、第三の部分と最後の部分でそれぞれ新たな話題を論じるという構成になっている。
- ④ この文章は、最初の部分で現状を分析し、第二の部分と第三の部分で観念的な議論を展開し、最後の部分で再び現状を詳細に分析するという構成になっている。

第2問

次の文章は、遠藤周作の小説『留学』の一節である。留学先の巴里に着いた田中は、逗留先のホテルで留学生の向坂と出会った。その翌日、向坂に連れられて日本人が集まるというキャフェ・ル・ドームを訪れた。以下はそれに続く場面である。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。なお、本文上の数字は行数を示す。（配点 50）

「なんだ。田中君じゃないか」

突然小肥りの男が彼を見て、驚いたように声をあげた。それは、さっき向坂が口にした日大学の助教授をしている小野だった。

「いつ、来たんだね」

「はあ、昨日、つきました」

「ああ、そうか。君がくることは、日本からの便りで知ってたが。そりゃあ御苦労さんでした」

小野は小野の周りの者に、自分が一階級上だということを示すためか、まるで研究室の中のように椅子に腰かけたまま鷹揚にうなずいてみせた。

「これ、田中君といってね。私と同じ専門だよ」

「また、外国文学者か、やりきれんね」

真中でコップを口にあてていた中年の男が酒に酔っているのか、赤黒い顔をこちらにみせ、からむような調子で言った。この男だけが田中と同じように、古びた背広を着てネクタイをつけていた。

「およしなさいよ。鍋さん。折角巴里に来た人に到着早々、カラんじゃ、悪いじゃないですか」

横にいたコールテンの上衣をきた青年が甘えるようにその男をとがめたが、そのくせ、今度はけしかける調子で田中に

「小説家の真鍋さんですよ。ストックホルムでのペン・クラブ会の帰りに巴里にこられたんです。今ね。あなたの先輩の小野さんとやりあわれてるんでしてね」

「イ閉口するな」小野は小肥りの丸顔に卑屈な笑いをうかべて言った。「ナベさんはからみ酒だからな」
「なに言ってるやがるんだ」

「まあ、いいさ。静まりなさい」

「よくないね。大体、外国文学者というのは何者だね。一体お前さんたちと文学との間には、どんな関係が成立しとるのかね。小説家のように、切っても切れない関係があると言うのかね。お前さんたちは、要するに他人のフンドシで角力すもうをとってるだけじゃねえか。あるいは、君らは無責任な解説者とも言えるな」

小説家の顔や言葉の調子には巴里ではなく、新宿や渋谷の飲屋の臭におがした。日本の文士が彼等外国文学者をつかまえてなじる、新宿や渋谷の飲屋の塩からや干物の臭がした。

「どうだね。田中君、今度は君が」小野はたくみに相手のほこ先を田中に向けさせて、「君が、返答をしなさいよ。巴里に留学してきた若い外国文学者の秀才としてさ」

「なにが、秀才だい。気障きざな言葉を使いなさんな。そんなものが何だね、一度も文学に体を張ったことがなくせに」

体を張るという言葉も日本の文士がよく使う言葉の一つだった。しかし、その言葉にもやはり飲屋の酒と、塩からや干物の臭気がした。

「体を張らないというのは……」田中は自分に注がれている若い画家たちの眼を感じながら、小さな声で「要するに、ぼくらが何も作品を創れないということですか」

「A創らない者に、創る者の哀しみや苦しさがわかるかと言うことだよ」
(注1)

真鍋の大声に店の外人客たちがふりかえった。銀盆の上にアペリチーフやコニャックを乗せて運んでいた給仕が、当惑したように人差し指を立ててみせた。日本人の若い画家たちは、ずるさと皮肉とのまじったうす笑いをいっせいに頬ほにうかべた。その冷笑のなかには自分たちも真鍋と同じように作品を創る芸術家だが、お前ら外国文学者はその作業を放棄した連中だという優越感があらわれていた。

「でも、創る、創らないということよりも、何を創ったかということが大切なんです」
「なんだね。それア」

「つまり小説を創って、創る行為の優位を誇るのには意味がないと思うんです。小説家は世界中、ウヨウヨいますが、彼等の存在価値があるのは、傑作を書いた時だけでしょ。それ以外にはないと思うんですけど」

田中は自分の声が興奮のために上ずっていくのを感じた。脂の^{あぶら}にじみ出たひどい鼻に、眼鏡を指先でずりあげ、彼は自分を見ている小野の当惑した眼と若い画家たちの少し敵意のこもった眼とをくるくると意識しながら、懸命に抗弁をした。

「すると何かね、日本の作家や批評家たちは、お前さんたちの専攻している仏蘭西^{フランス}の作家にくらべると、はるかに劣ると言いたいわけだな」

「はるかに劣ります」田中は言っではならぬ言葉を遂に口に出してしまった。「それはぼくのようなもんでもはつきり、断言できます。失敬ですけど、真鍋さんの代表作だって、この国の一流に比較すれば三流作品でしょう。この国では今の真鍋さんでも、まだ本当の作家として通用してないかも知れません」

「おっしゃったね。その酷評は素直に受けとめよう」真鍋は強がりを見せたが、その顔はひきつった。「しかし、俺ア、君に俺の作品を批評してくれなんて頼んでないね。あんた、問題をすりかえなさんな。人のことより、おのが身を反省してみろよ。一体、君は俺のように創らないかわりに、文学に何を賭^かけているかね」

「たとえば……傑作を^{ほんやく}翻訳しようと思います」

「へえ……血のかよった人間の言葉を九官鳥のようにまねするのが、翻訳というわけですかい。とすると、外国文学者っていうのは九官鳥だな。イヤ、それでもいいんだ。しかし、九官鳥なら自分が九官鳥であるという悲しさや辛さで生きてもらいたいね。お前さんたち日本の外国文学者には、それが一向ないじゃないか」

「どうして、そんなことがわかりますか」田中は眼鏡を鼻先におとしたまま、高い声で怒鳴った。

「ぼくらに九官鳥としての寂しさや哀しさがないとあなた、どうして断定できるのですか」

75

「困ったもんだ、あいつは。仏文学者の中でも田舎者いなかものと言われている男だね」
 そんな弁解でもしているぐらいわかっていた。

70

小肥りの体をゆっくりと椅子からあげた。若い画家たちも田中を黙殺したまま、ぞろぞろとその後からついていった。新参者のくせに生意気なというその感情が、店を出ていくみんなの背中からはつきりと感じられた。向坂は黙って椅子をきしませながら煙草をふかしていた。

「どうも……あなたにまで迷惑をかけて」田中は顔を強張こわばらせて頭をさげた。

「なあに、気にしなさんな。小野さんは君をかばっただけなんだから」

しかし、田中にははつきりと想像できた。ル・ドームを出た連中にむかって、小野が小肥りの体をゆさぶりながら

65

小野は真鍋の機嫌をとるように、外套がいたうを手にとって

「クーポールで飲みなおそうよ」

それから田中を冷やかに見おろすと

「じゃあ、いづれ」

60

一座は急に静まりかえると、白々とした空氣がながれ始めた。今まで狡ずるそうな微笑をうかべて二人の話を聞いていた若い画家連中は、煙草の煙を無意味に天井に吹きあげたり、画商との交渉や売り値段のことをひそひそと話しはじめた。

「まあいい。まあよし」真鍋はその白ゆけた空氣に気がつく、磊落らいらくな笑声をつくって「小野さん、あんたより、君のこの後輩のほうが、ずっとサムライだな。いや、氣に入ったよ。俺の作品をつまらんと云った点など大いに氣に入ったよ。おい、貴様、握手しよう」手を出して、田中にさしのべた。田中は小説家のねつとりと汗ばんだ手を握りながら、なにか、屈辱的な哀しみのこみあげてくるのを感じた。B 俺は失敗した。巴里に到着早々、俺はこの日本人たちの前で出すぎたまねをした。これは彼を不快そうに横眼でちらっと見た小野の顔色ではつきりわかった。

「河岸かしを変えるか、鍋さん」

「あなただけじゃないですよ。巴里にしていると心身の疲れや、色々な人間関係のウルサさのために……」と向坂は自分に言いかけせるように呟いた。^{（つぶや）}「妙に神経が刺々しくなるもんです。その上、外国にいくと日本人同士には職業的な競争心や嫉妬心が起きるのも、特徴ですよ。一番いやなのは、巴里の日本人のこの競争心という奴だ。だからぼくは、一人で生活することにしたんです」

田中は眼鏡の奥で哀しそうに眼をしばたたきながら、うなずいた。

ホテルまで二人は黙って帰った。向坂もほとんど口をきかなかった。その向坂は三階の階段まで登ると

^{（注2）}
「ぼん・ぬうい」

と仏蘭西語で一言、言っただけ、廊下に姿を消した。とり残された田中は、自分の部屋にたどりつくと、手さぐりで電気をつけた。出がけに書きかけた葉書が暗い灯の中で机にちらばり、風呂敷包みとトランクがみじめにころがっていた。キャフェでの失敗はまだ彼の心の全部を苦しめていたが、なによりも気にかかるのは先輩の小野に冷やかな眼で見られてしまったということだった。巴里に来たばかりの自分が限界をこえた振舞いを、前からここに居る日本人たちの前でやってしまった以上、今後、どういう眼で見られるかは想像できる。

けれども、彼が日本の現在の小説家のほとんどを心中軽蔑していたのは本心である。それは彼だけではなく、大学の研究室の者や彼の知っている外国文学者のほとんどに共通した感情である。どう見ても、日本の現在の小説家の書くものが、仏蘭西の作家のものより劣っていないくても優れているのだとは田中には思えない。その正直な気持を日本の飲屋で小説家に紹介されても決して口に出さないのは外国文学者の習慣なのに、巴里に来て二日目に吐きだしてしまったのは、向坂の言うように旅の疲れで自分の神経がとがっていたためだろうか。

「なにも創らん者に、創る者の辛さがわかるかい」

真鍋の台詞は、日本の文士が、評論家や外国文学者をきめつける時の取っておきの言葉である。その台詞がどんなに単純で愚劣かということぐらい田中にもよくわかっていたが、しかし、自分の胸に手を当ててみる時、彼にはそれを笑って聞きながすほ

どの信念はまだ出来あがっていなかった。学生時代、自分がかつて小説家になろうと考えた時期があった田中には、つくらないという劣等感^{せうとうかん}は外国文学をやりながら全く消えていなかった。

（おい、おい、なんですか。毎月の文芸雑誌にのるあなたの作品の辛さとは一体なんですか）

ベッドに仰向け^{あおむけ}になったまま田中は真鍋たちがそこにいるかのようにそう一人で叫んだ。しかしその声は、雨もりの染みついた天井にぶつかり空虚な部屋の中で消えていった。だが彼はその時、四十年前の今と同じような冬の午後に、自分のいるこのホテルのどこかの一室で、女中一人に見とられて死んだプルースト^{注3}の臨終を思いだした。死ぬその日の朝まで、一五〇〇頁にのぼる龐大^{ぼうだい}な原稿に幾度も幾度も手を入れつづけたこの病弱な作家は、朝の三時頃に呼吸困難になったという。だがその直後ほんのわずかの間、息をふきかえすと、たった今、自分の感じた苦痛と瀕死^{ひんし}の感覚をそのまま作中人物の一人の臨終場面にすぐ織りこむために、あらい息づかいの中で女中に筆記させたのだ。

Cそれが創る者だ。田中には今、この部屋の壁に、そのプルーストの蝙蝠^{こうもつ}のような影が残っているような気がした。創る者の執念がこびりついているような気がした。昨夜から自分を息ぐるしくさせてきたものは、彼の記憶にあるそういつたプルーストの姿が存在していたためなのかもしれない。

しかし、そういう人々の作品を自分たち外国文学者が、九官鳥のように口まねをして訳したり紹介しているという真鍋の酷評はやはり彼を傷つけた。それは多分に日本の外国文学者にとっては事実であることも、田中は知っていたからである。窓をあけると、闇は昨夜のように城塞の厚い壁のように眼の前に立ちふさがっている。この闇の奥に幾百、幾千のプルーストのようなさまざまな執念がひそみ、わめいているような感じに田中は突然捉えられた。その創るものの執念にたいして外国文学者はどんな存在をもつのか、今、彼には次第に理解できなくなってきた。

（注） 1 アペリチーフやコニャック——酒の種類。

2 ばん・ぬうい——Bonne nuit. おやすみなさい。

3 プルースト——フランスの小説家（一八七〇～一九二二）。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

解答番号は 12 ～ 14。

- (ア) 鷹揚に 12
- ① ゆったりと落ち着いている様子で
 ② 大雑把でぞんざいな様子で
 ③ 他人を高所から見下ろす様子で
 ④ 人の目を気にしている様子で
 ⑤ 堂々として威張った様子で

- (イ) 閉口する 13
- ① 口をつつしむ
 ② がっかりする
 ③ 困ってしまう
 ④ 相手にしない
 ⑤ 驚きあきれる

- (ウ) 白けた空気 14
- ① とげとげしい雰囲気
 ② 興ざめた雰囲気
 ③ 落ち着いた雰囲気
 ④ 陰険な雰囲気
 ⑤ 不穏な雰囲気

問2

傍線部A「創らない者に、創る者の哀しみや苦しさがわかるかと言うことだよ」とあるが、このように言う「真鍋」についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

- ① 芸術の都パリに芸術とは無縁の学者ばかりが次々と留学してくることに苛立^{いらだ}つ真鍋は、創作する苦しみも知らず、ただ外国文学を研究するだけでは留学する意味がないと決めつけている。
- ② 芸術家としての自負を持つ真鍋は、他人の作品に寄りかかるばかりで自分の力では何も生み出すことがない者には、創作に自らの存在を賭けている芸術家の苦悩を理解できるはずがないと考えている。
- ③ 日本文学の優越性を信じている真鍋は、創作の苦勞については何も知らないのに、外国文学を過大に評価したり日本文学を不当に批判したりする者の無責任な態度を苦々しく思っている。
- ④ 芸術家とその作品との間には確固たる結びつきがあると考えている真鍋は、芸術を享受する者には、作品だけでなくその背後にある芸術家の悲哀をも理解してもらいたいと切望している。
- ⑤ 人生経験の浅い人間には真の芸術はわからないと考えている真鍋は、芸術に体を張ったこともないのに生意気な口をきく若い学者たちには、創作上の辛さや苦しみがわからないだろうと思っている。

問3 傍線部B「俺は失敗した。」とあるが、この時の「田中」の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうち

から一つ選べ。解答番号は 16。

- ① 留学先の同胞たちとは友好的な関係を築いておくべきだったのに、興奮のあまり口に出すべきではなかった本心を思わず吐露して、到着早々自分の立場を悪くしてしまったと後悔している。
- ② 有名な小説家である真鍋と親しくなる好機だったのに、持論を展開することに躍起になって真鍋を怒らせたばかりか、その場を白けさせてしまった自分の子供じみた振る舞いを深く反省している。
- ③ パリに来てまで日本にいた時と同じように不毛な文学談義に熱中する周囲の者たちに苛立ち、衝突を恐れず自分の信念を主張したのに、結局は妥協し握手までかわしたことを恥じている。
- ④ 芸術についての自分の考えを冷静に論じるつもりだったのに、旅の疲れから神経が高ぶり感情的になった結果、論敵に付け入る隙を与えてしまい、言い負かされたことを悔しがっている。
- ⑤ 留学生生活の成否は当地の日本人社会での振る舞い方にかかっているのに、自らの不注意な言動により、他の誰よりも大切にすべきだった先輩の小野との関係を損ねてしまい、前途を悲観し始めている。

問4

本文において「小野」はどのような人物として描かれているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 17。

- ① 自らの体面を何よりも大切にし、周囲に自分の権威を見せつけるためには、後輩を利用することも辞さない利己的な人物として描かれている。
- ② 居丈高で意地が悪いような振る舞いを見せているが、実際はその場を取り繕って後輩をかばうような優しいところのある人物として描かれている。
- ③ 自分の認めた相手には安易に迎合するが、意に染まない相手に対しては必要以上に厳しく当たる、好き嫌いの激しい人物として描かれている。
- ④ 権威的な振る舞いを見せるところもあるが、周囲の雰囲気を感じ取り、巧みにその場を取りしきる世知に長けた面もある人物として描かれている。
- ⑤ 自らは研究者の立場に身を置きながら、日本の芸術を発展させるために、研究者と芸術家との間を巧みに取りもとうとする、老成した人物として描かれている。

問5 傍線部C「それが創る者だ。」とあるが、この時の「田中」の内面の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

18。

- ① 日本の文壇でしか通用しない論理を振りかざす真鍋との話を通じて、日本の小説家はやはり三流に過ぎないと改めて確信する一方で、プルーストの臨終に際してのエピソードを思い出し、研究者としての自分が目指すべきものは、プルーストの作品のような傑作に向き合うことだと決意を固めている。
- ② プルーストのような真の創作者の生き方を思うにつけ、日本で小説家としての地位を確立した真鍋であっても一流とは呼べないと思う一方、そんな真鍋との議論に敗れた自分は小説を書く才能がないと痛感し、それまで完全には諦めきれずにいた創作の道を断念せざるを得ないと、失意を味わっている。
- ③ 自らの生を賭けて作品を書くことに固執したプルーストこそが真に創作者の名に値するのであり、傑作とは言い難い作品を量産している真鍋などは本当の意味で創作の苦しみを知らないと思いつつも、かつて創作を断念したことへの劣等感もぬぐいされず、研究者としての自分に迷いが生じ始めている。
- ④ 死ぬ間際まで創作への執念を燃やし続けたプルーストこそ真の創作者であると思いつけられ、毎月作品を雑誌に載せることに汲々^{きふきふ}としている真鍋や、他人の作品をただ批評したり翻訳したりするばかりで自ら作品を生み出すことができない自分は、文学に携わる資格がないのではないかと自問し始めている。
- ⑤ 自らの死を真摯^{しんし}に見つめそれをも創作に活かそうとしたプルーストに比べれば、口先で創作の苦勞を言いつのるだけの真鍋は真の創作者とは言えないと改めて感じ、そのような作家よりは、研究者として世界的な傑作を翻訳することに取り組む自分の方がよほど文学の発展に寄与していると自負している。

問6 この文章の内容と表現についての説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は

問わない。解答番号は

19

20

。

- ① 48・49行目「君」「あんた」、60行目「貴様」というように、真鍋が田中を呼ぶ時に頻繁に呼称を変えていることから、真鍋の田中に対する評価が大きく揺らいでいることが読みとれる。
- ② 52行目「九官鳥のように」、60行目「ずっとサムライだな」とあるが、これらの表現は巧みな擬人法を用いて外国文学者を貶めようとする真鍋の心情が暗示されたものになっている。
- ③ 69行目「若い画家たちも田中を黙殺したまま、そろそろとその後からついていった」という表現には、文学的な議論にはまったく無関心な画家たちの姿が表れている。
- ④ 77行目の「あなただけじゃないですよ。」といった向坂の言葉からは、苦しい立場に立たされた田中を慰めるとともに、パリで留学生生活を送ることの難しさを痛感している向坂自身のありようもうかがえる。
- ⑤ 本文は、様々な立場から芸術に関わっている複数の人物を主人公の周囲に配置することによって、創作をめぐるあれこれと思いをめぐらせる主人公の姿を浮き彫りにしている。
- ⑥ 本文は実作者である真鍋の芸術観と、研究者である小野や田中の芸術観とを対照的なものとして描き分けることで、作品世界に重層性をもたせている。

（下書き用紙）

国語の試験問題は次に続く。

第3問

次の文章は『栄花物語』の一節である。藤原伊周（帥殿）は、政争に敗れて筑紫に配流されていたが、妹の中宮定子（宮の御前）が、敦康親王（若宮・一の宮）を出産するという慶事により罪を許され、帰京することになった。以下の文章は、それに続くものである。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。（配点 50）

かの筑紫には、赤瘡かしこにもいみじければ、帥殿、急ぎ立たせ給へども、大弐の、「このごろ過ごして上らせ給へ。道のほどいと恐ろしう侍り。御送りに参らむ下人なども、いと不便に侍らむ」など申しければ、げにと思しめして、心もとなく思しながら、立ちどまらせ給ひて、世の人すこし病みさかりて上らせ給ふ。このほどに、二位、この瘡にて失せにけり。いみじうあはれなることもなり。X かくて上らせ給ふも、ただ 若宮の御験と、あはれにうれしく思しつ上らせ給ふ。徒歩よりなれば、今はおはし着かせ給ひぬらむとのみ、いつしかと待ち聞こえさせ給ふ。

十二月に上り着かせ給ひ、かの致仕の大納言殿にこそはおはし着かせ給へる。上をはじめ奉りて、殿内の人々、喜びの涙ゆゆし。殿の有様など、昔にあらずあはれに荒れはてにけり。上も、何ごともえ聞こえさせ給はず、ただ涙におぼはれて見奉り給ふ。松君の、いと大きになり給へるをかき撫でて、いみじう泣かせ給へば、松君も、いかに思すに、か、目をすり給ひ、いとうれしと思したるも、あはれにことわりなり。殿、

A 浅茅生と荒れにけれどもふる里の松は木高くなりけるかな
また、殿、

B 来し方の生の松原いきて来て古き都を見るぞ悲しき
とのたまへば、上、

C そのかみの生の松原いきて来て身ながらあらぬ心地せしかな
とのたまふ。「まづ宮へ参らむ」とて、急ぎ出でさせ給ふにも、女君、涙こぼれさせ給ふ。

宮の御前、単の御衣の袖もしぼるばかりにておはします。「何ごもののどかになむ」など申させ給ふ。宮たち、さまざまにみじうつくしうおはしますを、一の宮をまづ抱き奉らまほしげに思せど、「いまいましうのみ、ものの覚え侍りて」と聞こえさせ給ふほども、なほいと世は定めがたし、平らかに誰も御命をたもたせ給ふのみこそ、世にめでたきことなりけれとのみぞ、見えさせ給ふ。故上の御ことをかへすがへす聞こえさせ給ひつつ、誰もいみじう泣かせ給ふ。よろづ一つ涙といふやうに見えさせ給ふも、あはれに見えさせ給ふ。

そのころ吉日して、故北の方の御墓を拝みに、帥殿、中納言、もろともに桜本に詣らせ給ふ。あはれに悲しう思されて、おはせましかばと思さるるにも、涙におぼれ給ふ。をりしも、雪いみじう降る。中納言、

つゆばかりにほひとどめて散りにける桜がもとを見るぞ悲しき

帥殿、

桜もと降るあは雪を花と見て折るにも袖ぞぬれまさりける

よろづあはれに聞こえおきて、泣く泣く帰らせ給ふ。いかで今はそこに御堂建てさせんとぞ、思し掟てける。

(注) 1 赤瘡——はしかの古名。当時大流行し、死者も多く出た。

2 大式——大宰府の次官。

3 病みさかりて——病の流行が静まって。

4 二位——帥殿の祖父である高階成忠。

5 徒歩よりなれば——陸路をとっているの。

6 致仕の大納言殿——源重光の邸宅。帥殿は重光の娘を妻としていた。

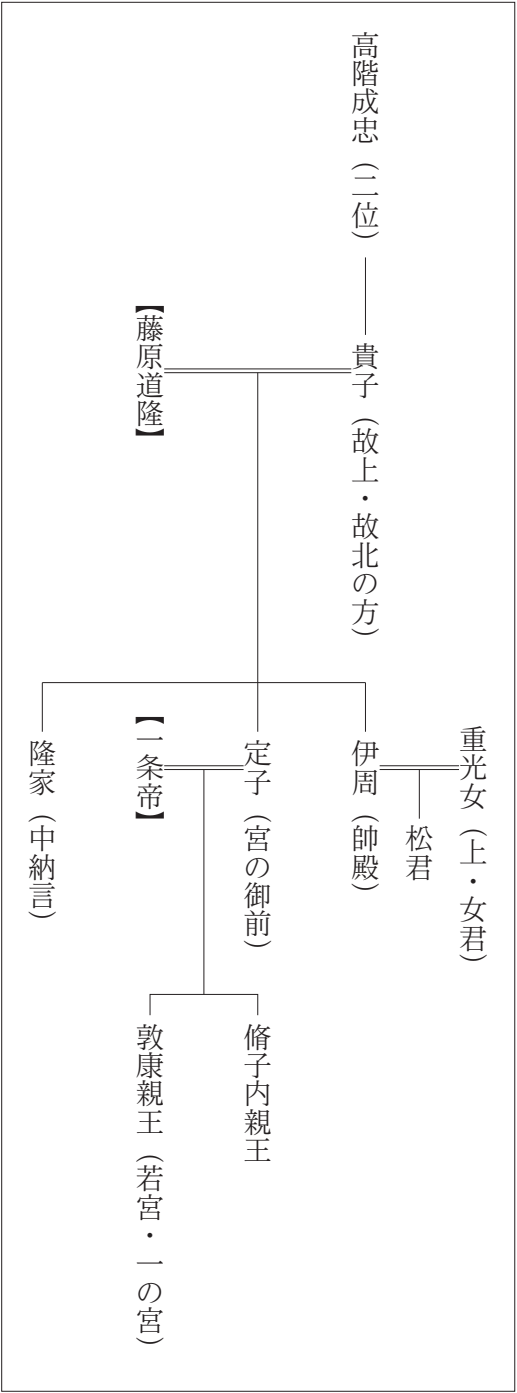
7 上——帥殿の妻。後出の「女君」も同じ。

8 松君——帥殿の息子。

- 9 生の松原——筑紫の地名。現在の福岡県福岡市西区にある。
- 10 宮——定子の御所。
- 11 宮たち——定子の生んだ脩子内親王と敦康親王。
- 12 いまいますうのみ——不吉なようにばかり。自らが肉親の喪に服していることをいう。
- 13 故上——帥殿と定子の母である高階貴子。後出の「故北の方」も同じ。帥殿が筑紫に在る間に亡くなり、都の近郊の桜本の地に埋葬された。

- 14 一つ涙——「うれしきも憂きも心は一つにて分かれぬものは涙なりけり」（『後撰和歌集』雑）を踏まえた表現。
- 15 中納言——帥殿の弟である藤原隆家。但馬（たじま現在の兵庫県北部）に配流されていたが、帥殿と同様に、許されて戻って来ていた。

人物関係図（ ）内は本文中での呼称。【 】は、本文中には登場しない人物。



問1 傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

21

23

。

(ア)

若宮の御驗

21

- ⑤ 若宮のご幸運
- ④ 若宮のご栄達
- ③ 若宮のお許し
- ② 若宮のおかけ
- ① 若宮のお言葉

(イ)

え聞こえさせ給はず

22

- ⑤ お聞きになることができて
- ④ おっしゃることができなくて
- ③ まったく申し上げることもなくて
- ② あまりうわさにもならなくて
- ① 申し上げなすることができなくて

(ウ)

いかで今はそこに御堂建てさせん

23

- ⑤ どうやってこの先そこに御堂を建てさせるのだろうか
- ④ どうすればすぐにそこに御堂を建てられるのだろうか
- ③ なんとかして近いうちにそこに御堂を建てさせよう
- ② どうにかして今からそこに御堂を建てなさるだろう
- ① なんのためにこれから御堂を建てのだろうか

問
2

波線部 **a** と **c** の文法的説明の組合せとして正しいものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は

24

⑤	a	完了の助動詞	b	格助詞	c	形容動詞の一部
④	a	断定の助動詞	b	完了の助動詞	c	格助詞
③	a	完了の助動詞	b	断定の助動詞	c	形容動詞の一部
②	a	断定の助動詞	b	完了の助動詞	c	形容動詞の一部
①	a	完了の助動詞	b	断定の助動詞	c	格助詞

問3 傍線部Ⅹ「かくて上らせ給ふ」とあるが、それに至るまでの経緯の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうち

から一つ選べ。解答番号は 25。

- ① 大貳は、赤瘡が大流行しているので見送りの召使いを都まで派遣できないと、帥殿の上京を思いとどませようとしたが、帥殿がいらだつ様子を恐ろしく感じて、やむなく出立を許可した。
- ② 大貳は、赤瘡の大流行するなか帥殿を上京させるのは困ったことだと思ったが、しっかりした召使いにお供をさせれば大丈夫だと、自らの不安を押し殺して帥殿を出立させることにした。
- ③ 帥殿は、一刻も早く上京したいので、赤瘡が流行している間はしばらく待てという大貳の説得に耳を貸しなくなかったが、流人の立場では逆らうこともできず、流行が静まってから出立した。
- ④ 帥殿は、大貳の助言を受けて、赤瘡の流行が少し静まってから上京しようと思っていたのだが、祖父が赤瘡で亡くなったという知らせを受けて、葬儀に駆けつけるために、急いで出立した。
- ⑤ 帥殿は、赤瘡の大流行するなか上京するのは道中が危険で何かと不都合だろうという大貳の言葉に納得して、じれったく思いながらも筑紫にとどまり、流行が静まったところで出立した。

問4

AとCの和歌に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 26。

① Aは帥殿の歌で、「浅茅生と」が「荒れ」の枕詞まくらごしらへとなっており、庭が以前と比べ荒れ果てて、松もずいぶん高く伸びたものだと、自分が邸やしきを留守にしていた時間の長さにあらためて驚く気持ちを詠んでいる。

② Aは帥殿の歌で、「松」に息子の「松君」の名が掛けられており、自分が筑紫に配流されている間に松が高く伸びたように、わが子松君もいつのまにか大きく成長したことだという感慨を詠んでいる。

③ Bは帥殿の歌で、「来し方の生の松原いきて来て」が「古き」を導く序詞じよごしらへとなっており、筑紫から戻って来て、相変わらず保守的で代わり映えのしない都の様子を目にした時の失望感を詠んでいる。

④ Cは帥殿の妻の歌で、「いきて」に「行きて」と「生きて」が掛けられており、筑紫に行き、生きて帰京した帥殿の姿が昔とはまるで別人のようだと、その配流先での苦労を思いやる気持ちを詠んでいる。

⑤ Cは帥殿の妻の歌で、「松原」と「いきて」が「身」の縁語であり、帥殿が流された当時は、自分とともに筑紫に行きたいと涙したが、これからはずっと一緒にいられると安堵あんどする気持ちを詠んでいる。

問5 傍線部Y「泣く泣く帰らせ給ふ」とあるが、このときの帥殿と中納言の心情の説明として最も適当なものを、次の①ゝ

⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 27。

- ① もし祖父が生きていたならば、一緒に母の墓前に参ることができたろうにと残念に思い、配流されている間に次々と肉親を失っていった自分たちの不運を嘆いている。
- ② 祖父は自分たちが帰京する前に亡くなってしまったので、後ろ盾になってくれる人ももうこの世に存在せず、この先自分たちはどうすればよいのかと途方に暮れている。
- ③ 母がもし生きていたならば、どんなにか帰京を喜び合えてうれしかっただろうにと思いながら、母はもうこの世にはいないのだという悲しみをしみじみと感じている。
- ④ 母はすでに亡くなっているのに、もう自分たちの帰京を喜んではもらえないのだが、母の死があらためて世の無常を自分たちに気づかせてくれたことだと心打たれている。
- ⑤ 母がまだこの世にいたら、桜の花と見間違えるように散る雪を皆でながめることもできただろうに、それももうかわないと、配流されていたことを恨めしく思っている。

問6

この文章の内容に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は

28。

① 大貳は、筑紫で帥殿を見送った後、「今はおはし着かせ給ひぬらむ」とばかり思い、帥殿一行が何ごともなく旅を終えたかどうかと気をもみながら、無事に到着したという都からの報告をひたすら待っていた。

② 帥殿は、帰京する途中は「あはれにうれしく思いつつ」とその喜びを隠そうとしなかったが、帰京して「昔にあらずあはれに荒れはて」た邸を目にしたとたん、自らがかつての権勢を失ったことを思い知り、落胆した。

③ 帥殿の妻の父である大納言は、長い間離ればなれになっていた帥殿との再会を「目をすり給ひ、いとうれしと思したる」幼い松君の様子を目にし、それも「あはれにことわりなり」と自らもあふれる涙をぬぐった。

④ 宮の御前は、罪を許されて都へ戻って来ることができた兄の帥殿と再会して、「単の御衣の袖もしぼるばかり」に涙を流し、その子である宮たちは、帥殿が筑紫に配流されている間に「いみじうつくしう」育っていた。

⑤ 帥殿と宮の御前は、帥殿の配流という逆境のなか「誰も御命をたもたせ給ふ」がゆえに、宮の御前は子どもに恵まれ、帥殿は帰京できたのだと、互いの幸運を喜んで泣き、その様子は「よろづ一つ涙」というように見えた。

（下書き用紙）

国語の試験問題は次に続く。

第4問 次の文章は、南北朝時代、北朝の北魏ほくぎの皇帝世祖せいそ（太武帝）に尚書省（中央行政官庁）の長官として仕えた古弼こひつに関する話である。これを読んで、後の問い（問1～7）に答えよ。（設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。）

（配点 50）

世祖大閱（注1）、将校獵（注2）於河西（注3）。弼留守（注4）。詔以肥馬（注5）給（注6）騎人（注7）、弼命（注8）

給（注9）弱者（注10）。世祖大怒曰、「尖頭奴（注11）、敢裁量朕也（注12）。朕還台（注13）、先斬此奴。」

弼頭尖（注14）、世祖常名之曰筆頭（注15）。是以時人呼為筆公（注16）。弼属官惶怖（注17）

懼誅（注18）。弼告之曰、「吾以為、事君使（注19）毘（注20）不（注21）適（注22）盤遊（注23）、其罪小也。」

不備不虞（注24）、使（注25）戎寇（注26）恣逸（注27）、其罪大也。今北狄孔熾（注28）、南虜未滅（注29）、

狡焉之志（注30）、窺伺边境（注31）、是吾憂也。故選肥馬（注32）、為不虞之遠慮（注33）。

苟使国家有利（注34）、吾何避死乎。明主可以理干（注35）。此自吾罪。非卿等之

咎。世祖聞而歎曰、「有臣如此、国之宝也。」賜衣一襲・馬二匹・

鹿十頭^ラ

(魏^{ぎしゆ}収^{ゆう}『魏書^{ぎしよ}』による)

(注)

- 1 閱——軍隊を檢閲する。
- 2 校獵——柵^{さく}に獸を追ひ込んで捕える。
- 3 河西——黄河以北の地方。
- 4 留守——皇帝の不在中、都を守る。
- 5 裁量——自分の考えでとりはからって処理する。
- 6 台——朝廷。
- 7 惶怖——恐れる。
- 8 畋獵——狩りをする。
- 9 盤遊——節度なく楽しみ遊ぶこと。
- 10 戎寇——異民族。
- 11 恣逸——勝手気ままに振る舞う。
- 12 北狄——北方の異民族。
- 13 南虜——南方の敵。
- 14 狡焉——ずるがしこいこと。
- 15 軍実——軍の装備。

問1 傍線部(1)「遠慮」・(2)「理」の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

解答番号は 29・30。

(1)

「遠慮」

29

- ① 人の依頼を断ること
- ② 国家の安泰を願う心
- ③ 控えめな態度を取ること
- ④ 将来まで見通した深い考え
- ⑤ 現実を見つめた堅実な考え方

(2)

「理」

30

- ① 心理
- ② 理想
- ③ 道理
- ④ 理解
- ⑤ 理由

問2 傍線部A「将校_三獵_二於_一河西」の返り点の付け方とその読み方として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一

つ選べ。解答番号は 31。

- ① 将校_三獵_二於_一河西_二 将に河西に校獵せん
- ② 将校_三獵_二於_一河西_二 将に河西に校獵すべし
- ③ 将校_三獵_二於_一河西_二 将に河西に於て校獵せんとす
- ④ 将校_三獵_二於_一河西_二 将に河西に於て校獵すべし
- ⑤ 将校_三獵_二於_一河西_二 将に河西に校獵せんとす

問3 傍線部B「世祖大怒」とあるが、その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解

答番号は 32。

- ① 古弼が、狩獵を軍事訓練の一環として重んじる自分の考えに反対して、貧弱な兵士と馬しか用意しなかったから。
- ② 古弼が、屈強な兵士を自分の狩獵の供につけよという自分の言い付けに従わず、貧弱な兵士ばかりをよこしたから。
- ③ 古弼が、狩獵の供をする者たちのためによく肥えた馬を用意せよという自分の命令に背いて、貧弱な馬を支給したから。
- ④ 古弼が、狩獵を楽しむにはよく肥えた馬と屈強な兵士が必要であるという常識さえ知らず、貧弱な兵士と馬ばかり準備したから。
- ⑤ 古弼が無能で、狩獵のためによく肥えた馬を用意せよという自分の要求に応えられず、貧弱な馬しか用意できなかったから。

問4

傍線部C「不虞」とは、具体的にどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

33。

- ① 北魏が北方の異民族や南方の敵国に出兵すること。
- ② 北魏が北方の異民族や南方の敵国の侵略を受けること。
- ③ 世祖が狩猟の最中に獣によって危害を加えられること。
- ④ 世祖が都を留守にしている間にクーデターが起こること。
- ⑤ 国境に配属された軍隊が異民族や敵国との戦いで敗れること。

問5

傍線部D「苟使国家有利、吾何避死乎」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

34。

- ① もし私が国家の役に立つ人間なら、是非とも死を避けなければなりません。
- ② たとえ国家が利益を得たとしても、私は死を避けることができないでしょう。
- ③ もし国家が利益を得られるのなら、私は死を避けようとは思いません。
- ④ 私が国家にとって有益な存在だとしても、死を避けられないかもしれません。
- ⑤ 私は国家にとって有益な存在なのだから、きっと死を避けられることでしょう。

問6 傍線部E「有_二臣如_レ此、国之宝也」の書き下し文として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解

答番号は 35。

- ① 臣のかくのごとき有るは、国の宝なりと
- ② 臣のこれにしく有るは、国の宝ならんやと
- ③ 臣にこれのごとき有るは、国の宝なるかと
- ④ 臣にかくのごとき有るは、国の宝ならんやと
- ⑤ 臣はこれにしく有るは、国の宝なりと

問7 二重傍線部「世祖聞而歎曰」とあるが、世祖はなぜ「歎」じたのか。その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

① ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は 36。

① 古弼が、異民族や敵国に敗れた屈辱をすっかり忘れて狩猟に夢中になっている自分の誤りに気づかせるために、わざと自分の命令に従わなかったのだと知り、古弼の真意を察せず怒りを抱いた自分の愚かさを恥じたから。

② 古弼が、常に国家の安泰を第一に考えていて、よく肥えた馬や屈強な兵士を大量に辺境に送っているために自分の要求に応えられなかったのだと知り、古弼の能力を正當に評価せず、一時の怒りにまかせて殺そうと考えた自分の不明を恥じたから。

③ 古弼が、辺境の事情に精通していて、今は狩猟を楽しむのではなく、国家の安泰のために辺境の軍備を増強して異民族や敵国と戦い、一氣に打ち破るべき時機だと考えていると知り、高い見識を持つ人物だと評価したから。

④ 古弼が、国家が異民族や敵国と熾烈な戦いを繰り返している今、狩猟にうつつを抜かしていることが大きな過ちであることを皇帝に気づかせたいと考え、自分の怒りも恐れず反抗したと知り、稀に見る剛直な人物だと評価したから。

⑤ 古弼が、異民族や敵国と緊張状態にある中で、国家にとって大切なのは狩猟を行うことではなく、辺境における不測の事態に備えることであると考え、死も覚悟の上で自分の命令に背いたと知り、忠義で思慮深い人物だと評価したから。

